

2024年12月8日(日)

カトリック住吉教会・待降節黙想会

1. 現代人は待つのが苦手

私たちが暮らすこの社会は、通信手段の発達によって、世界中のニュースをすぐさま手に入れることが可能になり、インターネットを通して私たちは遠くにいる人とつながり、情報を共有したりできます。そのような私たちの社会の一つの特徴は「即時性」ということです。交通機関も情報も早く走ります。そのせいか現代人はせっかちで「待つ」ということが苦手になり、その価値を見失いがちです。だからこそ今、その価値を再発見しなければならないと思います。

例えば、私たちが食べている魚も肉も野菜も本来は自然の恵みのはずですが、今やそれらは大量かつ時短で収穫するため、人為的に育てられ決して自然ではありません。また、大量生産のお陰で低価格になった衣服や手間ひまをかけずに食べることのできるレトルト食品など、さまざまな物がすぐ手に入ります。

またスマホがあれば、アフリカでも日本でも、どこの国にいたとしても話ができるだけでなく、同時にビデオコールで顔を見ながら会話を楽しめます。テレビでは毎日ウクライナやガザ、レバノン、シリアでの戦争のニュースが流れ、まるで自分が戦争の現場にいるかのように最新情報を把握することができます。

しかし、神は時間をかけて天地を創造されました。創世記の作者によれば神は7日間をかけて世界とそこにあるものを創造されたと書かれています。しかし科学が教えるように地球はビッグバンによって誕生し、ゆっくりと進化しながら現在の形になったのです。ここに神の時と人間の時間の質の差を見ることができます。

たとえ、毎日太陽が昇ったり沈んだりしても時の流れである歴史は終末に向かっていきます。始まったものはすべて終わりを迎え、この世も地球も人間も必ず幕を閉じて終わりを体験します。しかし、その終わりは単に「無くなる」ということではなく、「完成」という意味が含まれています。キリスト信者にとって世の初めと終わりに神はおられ、歴史を導いておられます。

2. 神様はすべてを創造された。

地球が誕生したのは、今からおよそ 46 億年前と言われていています。そして人類が誕生したのが、およそ 700 万年前のアフリカだそうです。その人類の祖先がゆっくりと進化してきました。聖書はその真実を天地創造の物語ではっきりと記しています。地球も人間も自然ではなく、また偶然や必然的にでもなく、神によって創造されたのです。神はその言葉によって全てを創造されたのです。

神の言葉によって創造された宇宙を始め、地球も人間も神のものであり、神の支配の下にあるということです。神は宇宙全体の歴史を完成に導かれておられるのです。すべて創造されたものは、愛そのものである神の御旨によって存在しています。そして神は自ら造られた世界を人間に委ねられました。

3. 神様は自分に似せて人間を創造された

本来、人間は神にかたどって創造され、命の息を吹き入れられて生きるものとなり、アダムと名付けられ神との交わりの中で生きるものとして造られました。しかし、人間は不従順によって、神に背き、神との親しい関係を自らの選択によって失ってしまいました。が、それでもなお、神は決して自分が創造された人間を見捨てることをなさらず、預言者や指導者を通して人間を救いに導いておられます。

聖書の創世記からヨハネの黙示録まで登場する神は、遠く離れたところに存在される方ではなく、人間とともに、人間のうちにおられる神です。神はご自分が選ばれた古代イスラエルに救い主を遣わすと約束されました。「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み/その名をインマヌエルと呼ぶ。」（イザヤ書 7,14）。

4. ナザレのイエスの出来事

アダムから始まった人類の歴史では数え切れないほど有名な人の登場が繰り返されていますが、中でも歴史に変化をもたらしたのはナザレのイエスです。今日は西暦 2024 年 12 月 8 日（日）ですが、これは世界の共通事項です。この西暦の基準となったのが、イエス・キリストの誕生にほかなりません。つまり今年（2024 年）はイエス・キリストの誕生から 2024 年目ということです。人間の歴史の中でこのように大きな影響を与えた人物としてイエス・キリストに並ぶ人はいません。

ところで、西暦の初めに、パレスチナで不思議な出来事が起こりました。それは馬小屋で生まれた赤ん坊を通して神ご自身が受肉し、この世界にその姿を現されたということです。彼は聖霊によっておとめマリアから生まれ、「神は私たちと共におられる」という意味のインマヌエルと呼ばれ、自分の民を罪から救う使命を持っておられました。

初代キリスト共同体はこの出来事を信じ宣言していました。彼らにとって、ナザレのイエスは目に見えない神の反映であり、人間の歴史の中に現れた神で、世の救い主であるのです。こうしてイエスの内に旧約の予言が実現していることを弟子たちは徐々に悟りました。

イエスの弟子たちと初代キリスト共同体はそのイエスを「キリスト、油を注がれた方」と信仰告白し、そのメッセージ「福音または喜ばしい便り、よい知らせ、神の支配は人間の歴史に到来したこと」を宣べ伝えることがイエスから受けた自分たちの使命だと確信していました。

また、古代イスラエルには伝統的に黙示録に大いなる希望を見出していました。人々は世の終わりに最終的な預言者が現れ、彼によって神が世界を裁かれると信じていました。イエス様の時代にもその希望と期待があり、一つの重要な課題は「主の来臨」でした。彼らはイエスの言葉を思い起こしながら、主が再び来られるのを希望のうちに待っていたのです。

5. キリストは来られた時と同じように再び来られる

弟子たちと初代キリスト共同体の信仰告白と宣教活動は教会に大きな影響を与えてきました。それはイエスこそがメシアであり、この世の救い主であるとの確信で、キリストの来臨への希望に燃えていました。キリストはメシアとしてベツレヘムで人間の弱さをまもってこの世に到来されました。

私たちはその来臨に備えて辛抱強く、目覚めて待たなければなりません。イエス様の来臨は果たしていつなのでしょう。その時はだれにも想定できません。だから私たちに求められているのは「待つこと」なのです。「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである。」と聖書に書かれてある通りです。

